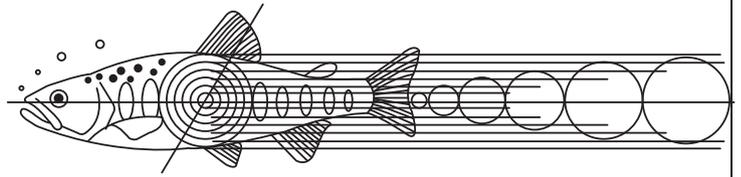


news

長良川市民学習会ニュース



長良川河口堰の開門調査を実現しよう



うげ
筥

写真 磯貝政司氏
本紙6ページ参照

No.24

2017年7月10日

導水路計画は終わっていない・・・2
活動報告・・・3
長良川漁師口伝・・・5
長良川と鮎鮪街道・・・7
水は賢く大切に使う時代が来た！・・・9

水道事業の危機はなぜ起きたか・・・11
岐阜県長良川河口堰調査検討会傍聴・・・13
揖斐峡 西平だより・・・14
事務局より・・・15
「よみがえれ長良川」参加団体紹介・・・16

長良川を放射能で汚してはならない！私たちは、原発の再稼働に反対します。

長良川に徳山ダムの水を流す導水路計画は終わっていない

長良川市民学習会代表 粕谷志郎

先日、新聞報道を見たある知人が「導水路計画は終わっていないんですね。」と、やや不思議そうな面持ちでつぶやきました。その新聞報道とは、よみがえれ長良川実行委員会として行った岐阜県への要請に関する記事です。導水路計画の中止、内ヶ谷ダムの建設中止、長良川河口堰のプチ開門を要請しました。これを見ての反応でした。徳山ダムに貯めた水を長良川と木曾川に流す導水路計画は、2009年に民主党政権によって凍結されました。その後、見直しの対象とされましたが、結論は見送られた状態です。見直された他のダム計画の多くは推進となり、中止となった計画のほとんどは事業者の意向によるものでした。唯一残った木曾川水系連絡導水路計画は、国交省・水資源機構がやりたいばかりの事業です。いつ推進のランプを点灯させるか、タイミングを見計らっている状況と考えられます。

計画が出された2007年の案は長良川に常時毎秒0.7 m³を流して、河口堰で貯めた水を木曾川へ送ろうとする、長良川を水路とする計画でした。賛成の意見は全く聞こえませんでした。やがて渇水時のみ毎秒4 m³を流すとする部分修正がなされました。しかし、これは長良川の鵜飼い場辺りの環境を破壊することになります。市民学習会のメンバーが毎月導水路の入り口にあたる西平ダムと放水先の千鳥橋あたりの水温を測定していますが、5℃以上の差になることもあります。こんな水を流したら冷たい徳山ダムの水は長良川の水の下に潜り込みます。ダム湖で発生した藻類も含み有機物の多い水が送られてきます。潜って層をなした下へは酸素が供給されません。川底がヘドロと化すことは目に見えています。

国交省のシミュレーションも、直ちに混合しない事を示しています。これを「影響は限定的」と表現しており、岐阜県の河川課も「限定的」と何処吹く風の他人事です。この限定された場所こそが、放流口から長良橋までの鵜飼いの心臓部です。鵜飼いの息の根を止める行為です。改めてこの計画の息の根こそを止める必要があります。

表紙のウナギの話と関連して

参加しよう 「うなぎ目線で川・海しらべ！」

1995年、日本自然保護協会は、市民の参加で日本の自然を調べる「自然しらべ」を始めました。きっかけは、長良川河口堰問題でした。

川の状況は改善しているのか？生きものたちにとってはどうなのか？

今年は環境省の絶滅危惧種1類に指定されているウナギ目線で調べます。

みなさんの近くの川に出かけ、ウナギにとっての障害物になる堰があるかないか、高さや魚道の有無などを、写真をつけて、調査情報を以下に送ってください。詳しくは自然保護協会のHPで。

調査機関： 2017年5月1日～9月30日

送り方： カメラとパソコンの方 <http://www.nacsj.or.jp/project/ss2017/>

スマホ (Android) の方 <http://www.nacsj.or.jp/project/ss2017/>

スマホ (iphone など) の方 nacsj@bio.ikimonosirabe.info



活動報告

長良川市民学習会 事務局長 武藤 仁

前号発行（2016.12/22）以降の活動報告をします。

「凍結」状態の徳山ダム導水路事業については一昨年11月、4年ぶりに突然「検討の場」第3回幹事会が開催されましたが、それ以後、再び公の場での動きが消えています。「事業継続」をめざす動きは水面下で続いているようです。

河口堰検証をめぐることは、昨年7月28日に愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会が提出した「再質問」に対して、国・事業者は12月26日に膨大な資料を添付して回答を出しましたが、ほとんどがまともに答えるものではありませんでした。しかも合同会議設置については、「関係県や関係者と相談する」と濁し、積極的に動こうとはしていません。

4月25日、第12回愛知県最適運用検討委員会が開催されました。先述した国・事業者の回答を踏まえ、小島座長から同氏が座長を務める「豊洲市場問題」PT議論にも触れながら、今後、河口堰をライフサイクルアセスメントの視野から抜本的に検討する必要性が示されました。それに沿った同委員会主催の5月28日の連続講座では利水と節水を正面から取り上げ、今後の河口堰の位置づけについて学びました。（関連9ページ）なお、第12回委員会では委員の一部交代があり、岐阜大学の古屋康則さんと長良川市民学習会の武藤仁が新たに委員に加わりました。

連続市民学習会「よみがえれ長良川」

導水路、河口堰問題が市民に見えにくい情勢の下で、これを打開するために私たちは、「166キロの清流を取り戻す」エネルギーを高めようと、よみがえれ長良川連続市民学習会を、会場を「ぎふメディアコスモス」にして計画しました。第1回は「長良川漁師口伝」と題して2月16日（木）に開催しました。磯貝政司さんの写真の鑑賞で長良川の魅力を確認し、大橋亮一さんの漁師としての語りから長良川の価値を確認しあいました。60名の参加者からは「長良川はやっぱり素晴らしい」「大橋さんの話で、長良川の漁のことがよく分かった」等の声が寄せられました。（関連5ページ）

第2回は、3月25日（土）に「長良川の昔とこれから」と題して高橋恒美さんの「長良川と鮎鮒街道」と平工頭太郎さんの「清流長良川で世代をつなぐ」の講演を聴き討論しました。中学生から高齢者まで幅広い世代の市民約80名が参加し盛会でした。（関連7ページ）



第3回は、8月19日（土）に「岐阜の魚と長良川の今」と題して開催します。向井貴彦（岐阜大学）さんの講演と武藤仁（当会）の報告が行われます。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

伊勢湾流域圏の再生シンポジウム

昨年からはまった「伊勢湾流域圏の再生シンポジウム」を3月12日（土）に名古屋市のウインクあいちにおいて開催しました。よみがえれ長良川実行委員会など5市民団体共催で、約70名の市民が参加し、「生物多様性の主流化」などが議論されました。

長良川下流域環境観察会

真夏のような快晴の5月21日(日)、千藤克彦さん(元長良川下流域生物相調査団)を講師に、河口堰のある長良川と、河口堰のない揖斐川と木曾川を比較しながら、午前は陸上から、午後は船に乗って下流域の環境の変化を観察しました。その後、赤須賀漁港でシジミプロジェクトの伊藤さんから最近の様子を伺いました。徳山ダム運用の影響か、揖斐川のシジミ漁も深刻な状況にあるようでした。参加者は名水労の若い組合員を含め15名でした。

観察会の詳細はホームページ <http://dousui.org/> の TOPICS でご覧ください。

長良川の環境保全を求め岐阜県に要請

5月26日(金)よみがえれ長良川実行委員会は、徳山ダム導水路事業の中止、長良川河口堰の開門調査、内ヶ谷ダム建設の再検証をめざして10名の要請団で岐阜県に要請を行いました。県側は井上清敬河川課長ほか4名の担当者が対応しましたが、長良川の現状を真摯に受け止める姿勢は示しませんでした。

なお、内ヶ谷ダム建設については2012年検証以後事業費が87億円増額され419億円となっています。検証時のB/C(便益/費用)は1.1と極めて小さく、事業の意義に大きな疑義が持たれましたが、増額になれば1.0を下回り事業が成り立ちません。説明を見ると工期の2年短縮でCを小さくし、流域住家戸数の見直しでBを大きくして事業の意義を繕っています。何のために作るのか?問題の大きい事業です。この問題の事業の工事現場を7月20日(木)に県の案内で見学します。JR岐阜駅南に10時に集合し、マイクロバスで現地へ向かいます。参加を希望される方は、武藤 090-1284-1298 までご連絡ください。



韓国ムン新政権下で6堰が開門

韓国のニュースによれば4大河川事業で建設された16堰のうち6堰がムン・ジェイン新政権の下で、本年6月から開門されます。右図の太丸が6月に開門する堰です。ナクトンガンで4か所。ヨンサンガン、クムガンで各1か所です。今後撤去を含めたダム見直しが急速に進みそうです。ナクトンガンでは、河口堰上流の4堰が開放され、大幅な環境改善が期待されます。ハマン堰は昨年視察しましたので長良川市民学習会ニュース No 23 の粕谷報告と渡辺報告をご覧ください。

なお、よみがえれ長良川実行委員会は12月2日(土)に長良川国際会議場において「開門シンポジウム」(仮称)開催することをめざして諫早、韓国の市民団体と協議を進めています。開門に向けた運動の交流と政策討論を企画します。みなさまのご要望・ご意見等を実行委員会にお寄せください。

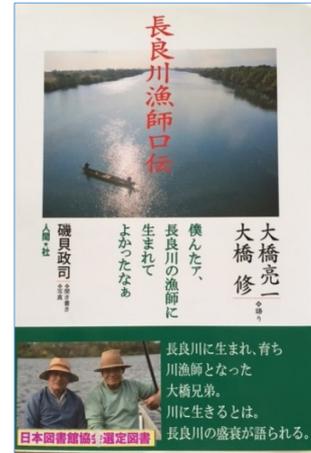


『長良川漁師口伝』

あたりまえだった風景があこがれの風景に変わる一瞬

高木邦子 よみがえれ長良川実行委員会

2月16日、岐阜市のメディアコスモスで「長良川漁師口伝」と題して長良川の漁師の大橋亮一さんと写真家の磯貝政司さんをゲストに市民学習会が行なわれた。河口堰ができる前の長良川の美しい風景や、大橋さんたちの網漁の風景なども映し出され、長良川の魅力に懐かしさを感じながら、同時に失ったものの大きさも痛感した。怒りがこみ上げてきてもおかしくない大橋さんは、いつもジョークを忘れない。面白おかしく長良川の危機を説明してくださる。しかし、今年のサツキマスの漁獲量にはさすがの大橋さんも肩を落としていた。「今年は32匹しかとれなかった。以前の1日の量と同じや。サツキマスも、もう来年からは幻の魚になる。」と嘆いておられた。全盛期は年間1000匹以上とれたサツキマスが、一昨年は100匹、昨年は52匹、そして今年はとうとう32匹まで激減してしまった。長良川河口堰には魚道が作られているが、運用から22年間でサツキマスが魚道で確認されたのは、数匹だけという話を聞いた事がある。大橋さんは「サツキマスはかしこいで魚道なんか通らん。ゲートの操作をする人に川への愛着があるかどうか。それが大事な事や。」と言っておられた。



大橋さんとは30年ほどのお付き合いになるが、大橋さんの素晴らしさは磯貝さんが18年の歳月をかけてまとめあげた著書『長良川漁師口伝』に凝縮されている。本業をやめてまで大橋さんたちの漁を本に残した磯貝さんの熱い思いが、写真にも文章にも表れている。誰が見ても「いい写真だね」と言われる写真はめったにないが、磯貝さんの写真は不思議なくらい人の心を素直な気持ちにさせてくれる。「現場百遍」という言葉を心に刻んで写真を撮り続けてきた磯貝さんは、「現場に何度も足を運び、よく見ることで見えないものが見えてくるようになる。」「見慣れてきた長良川の職漁師の姿が、今まさに消えようとしている。連綿と続いてきた長良川の漁文化が歴史の狭間に埋没してしまう。その危機感から本書は生まれました。」と文中で述べておられる。

大橋さんと弟の修さんの漁の話は何度読んでも面白く、学習会でもやはり会場を笑わせながら貴重な話をしていただいた。今回は本に書かれてある漁法の中から4つの漁法について紹介してみたい。亮一さんと修さんの言葉から、その漁法を伝えた父親定夫さんの偉業も伝わってくる。

トロ流し網 サツキマス漁

修 昔って言うのは、マスは100パーセント天然もので、大きさも揃ってまっとうで、小さいやつもそうおらへんかったし、今みたいな不揃いではなかったでねえ。

亮一 漁獲も1ヶ月で1人300匹くらいは捕れたでねえ。値段も1匹で土木作業員の日当ぐらいあったわ。いちばん初めに上ってくるマスは、背中と腹の方の幅が広く、平たいタイのような格好しとるもんで、ここらあたりでは「オヒラマス」って言うんやが、見た面が良く、大きいもんで値段も高う売れる

んや。魚というもんはサツキマスに限らず、すべての魚、早ようくるやつほど大きいでねえ。やっぱりあんで力持っとるでかなあ。海から上ってくるのでも、どういふもんや知らんが大きいやつが先にくる。それは今でも一緒や。

中蠟網（ちゅうろうあみ） アユ漁

亮一 中蠟っていう網は、川底を擦らずに上を浮いてくわ。増水したときは、川は濁水やがね。濁っとるもんやでアユも上へ浮いとるんや。ほんで、中蠟網でも掛かってくるんや。素人の人には、なんで浮いて流れてっても、魚がよう掛かるなあって思うけども、水がきれいになってきたら、その漁法では魚が捕れんっていうこっちゃ。網は、舟で縦に入れたり、横にも入れたりしてねえ、入れてまったら、松明（たいまつ）に火を点けて、その明かりで網のほうへ追い込むんや。また竿を使って、水面や舟を叩いたり、川底を突いたりもする。中蠟網はそういう漁法や。当時は、今の鵜飼と一緒に、松明を使っとったでねえ

筥（うげ） ウナギ漁

修 ウナギを捕ます上でのいちばんの基本は水温や。水温の高い低いによって筥の入れる場所が違うんや。5月、6月はそう流れの激しくない、なだらかな流れのちょっと深みのところに入れるんやて。その深さも3メートルもあつたらあかんよ。まんだ川底が冷えとるでねえ。1メートルか1メートル50くらい、ちょぼとした緩みのあるところに入れとくんがいいんや。とにかく、5月や6月はあまり深くない、ドブ〜んとしたとこでいいんや。それで7月になってきたら、すごく流れるとこやないとあかんのや。水温が上がってくると小魚全部、流れのある瀬に出るんやて。その小魚を狙ってウナギとか、ナマズとかドンコとかの生餌を食べる魚がみな集中するんや。だからそこへ入れればいいんや。基本は、小魚が教えてくれるんやて。

筥を作る大橋修さん（2012. 3. 15）



カニ籠 モクズガニ漁

修 いちばんわかりやすいのは、川底は絶対に平面じゃあないということや。平面が10メートル続いたら、次は上がったたり下がったり、ほんの少しの、わかるか、わからんかの変化が必ずあるんやわ。そこでカニの気持ちになって考えればいいんや。それがいちばん肝心なことや。上流から餌が流れてきたとするねえ。ほうしたら川底が平らなとこは水が平均して流れとって引っ掛かりがあらへんもんやで、餌はサーッと流れてってしまう。しかし、川底がちょっとでも変化しとると、水はきれいに流れるもんやで、隙間ができて餌が溜まるねえ。それで夜、カニは小さな目で匂いの少ない餌を平らなとこで捕らえるか、それとも溜まったやつを食べるかやけど、私なら溜まったとこで食べるわ。絶えずのい（動い）とると、少しでも溜まったのでは、溜まっとるほうが食べいいで確立が高いやろ。だからそこへカニ籠を入れてやらなあかん。カニの気持ちになりきって、どこで食べるかを考えたらいちばんようわかるんやて。

『長良川漁師口伝』語り/ 大橋亮一・修 聞き書き・写真/ 磯貝征司 発行所/ 人間社より抜粋

長良川と鮎鮓街道

高橋恒美 フリージャーナリスト

江戸時代に家康を始めとする将軍に献上された鮎鮓はどのように始まり、長良川の鵜飼とどんな関係があったのだろうか？当日は「鮎鮓街道」のイベントで再現された荷物の模型も用意され、鮎鮓をどう運んだのか、背景などについて、講師の高橋さんから興味深い話を聞くことができました。

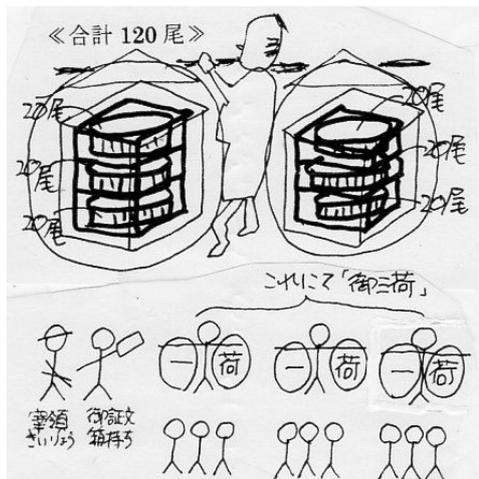
1 鮎鮓って、どんな味？

鮓(寿司)というと「にぎり寿司」や「押し寿司」を想像するが、これらは江戸中期に発案された当時のファーストフード。それまでの鮓は長時間かけて発酵させて作られた「熟鮓(なれずし)」。塩漬けた鮓にご飯を詰め長い時間をかけて発酵させたもので、琵琶湖の鮓鮓(ふなずし)に似た製法である。ただこの献上鮎鮓は5日目に食された「生熟れ(なまなれ)」で当時の味は正確にはわからない。今岐阜では山下鵜匠さんの店や川原町の泉屋、杉山町の「たか田八祥」で味わえる。好き嫌いは分かれるが、酸味が効いた酒と合いそうな大人の味である。



(仕込みの図) 鮎鮓を仕込んでいる「御鮓所」の作業図。つばきが飛ばぬようにマスクを着用している。将軍の口に入るものだけに、嚴重な注意が払われた。

2 どんな形で運んだの？



(三荷の図) 献上荷の搬送は、こんな形態で行われた。

長良川の鵜飼で捕った鮎は、長良川の近くの御鮓所(岐阜公園の西)で加工し、将軍の食前に上がる頃に食べごろになるよう逆算して漬け込まれた。献上鮎鮓の荷造りは、桶(約32cm)に20尾の鮎が詰められ、三つの桶がそれぞれ梱包された。一人の足が両肩に梱包され荷を一つずつ担いだ。人足一人分の荷は「一荷(いっか)」と言われ、50~60キロほどの重さになったようだ。鮎鮓献上は三荷が定型だったので一度に360尾の鮎が使われたことになる。

搬送は鮎のシーズンの5月から8月(旧暦)に15回前後、岐阜から江戸まで46の宿問屋をつないで行われた。笠松の高嶋家だけに残っている古文書によると、この搬送は「継立(つぎたて)」「宿次(しゅくつぎ)」と呼ばれた。笠松では毎回10人から15人の人足が招集され、農繁期には女性や医者、火消しなども動員された

記録がある。重い荷物を決められた時間に次の問屋まで粗相なく届けるのは大変な仕事だったと思われる。単純に計算しても時速4~5キロで小走りで届けたようだ。江戸までの46宿のうち、岐阜から稲沢までを鮎鮓街道と言われることが多い。この搬送は幕末まで260年間続けられた。

3 長良川の鮎、献上の背景

鮎鮎献上を最初に行ったのは、慶長8年(1603)美濃の代官大久保長安で、その年長安は鮎を捕獲する鵜匠を確保し、鵜飼以外の漁法を禁止するという鵜飼保護命令を出している。当時鮎を捕る鵜匠は長良に12人、小瀬に9人であったが、長い時代の間には増減もあったようである。長良川は今の川とは違い三本の川筋があり今よりは遥かに漁場も広がったが、10日ごとに献上鮎を捕獲するのは大変だったようである。

鮎鮎献上が本格的にスタートしたのは元和1年(1615)であった。元和5年には岐阜町、長良川は尾張領になり、尾張藩が鮎鮎献上の主役になった。本格的な鮎鮎献上が始まった理由は「家康が鮎鮎を食べてそのうまさに驚き」とも言われているがそれだけではなかったのではないかと。

長良川を理解する上で重要なのは、お隣の木曾川との関係だ。「川を制する者は国を制する」のことわざがあるが、木曾川については、木曾の木材を運ぶ「実益の川」と位置づけていた。

そして長良川の方は、「鮎」「鵜飼」というシンボルが存在し、その鮎を庶民に運ばせ、献上させることで、江戸幕府が長良川を支配していることを、内外に知らしめる役割りを果たさせていた、と思われる。

- 高橋さんの本「鮎鮎街道いま昔」 発行：岐阜新聞社
- 当日配布の資料は、市民学習会のHPに掲載されています。

参加者アンケートの感想より

- *鮎鮎が食べてみたい!(10代) *人の手で運ぶしかなかった時代に、鮎をはるばる運んでいた様子に大変驚いた。(40代)
- *実際の道具と詳しい鮎鮎街道の説明が興味深かった。(50代)
- *鮎鮎街道のイベントを今後も続けてください。(60代)
- *鵜飼をユネスコ世界無形文化遺産にするためには、私たちと長良川の結びつきを深める体験や歴史などの学習が必要だと思う。(70代)

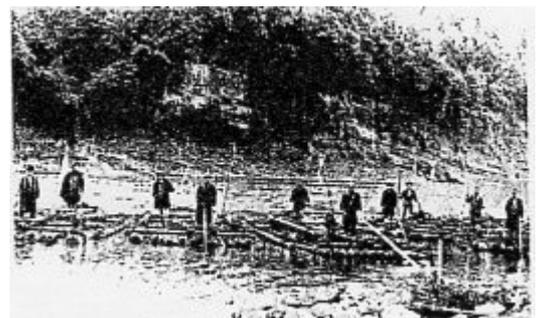
幕末まで続いた鮎鮎献上は幕府の統治の一つの象徴だったこと、当時の漁の様子、鵜飼との関係などを知り、それに携わった人々の苦労を想像することができました。(まとめ 田中万寿)



(鵜飼の図)江戸時代の長良川鵜飼図。今より一人多い「中鵜使(なかうつかい)」が乗船している。



(長良川の図)昔は3つの川筋から成っていた。



(木曾川の図)木曾川では「いかだ」が組まれて、木曾材が大量に供給された。写真は八百津の錦織。

水は賢く大切に使う時代が来た！ 愛知県の新たな水需要のプラン

「清流長良川流域の生き物・生活・産業」連続講座 第4回から

富樫 幸一 愛知県長良川河口堰最適運用検討委員

愛知県の長良川河口堰最適運用検討委員会が、市民に呼びかけて一昨年から開催されてきた連続講座は、鵜飼、ウナギ、韓日交流と伝統漁法に続いて、今回は利水と節水を正面から取り上げて、2017年5月28日に愛知大学笹島キャンパスで行なわれました。

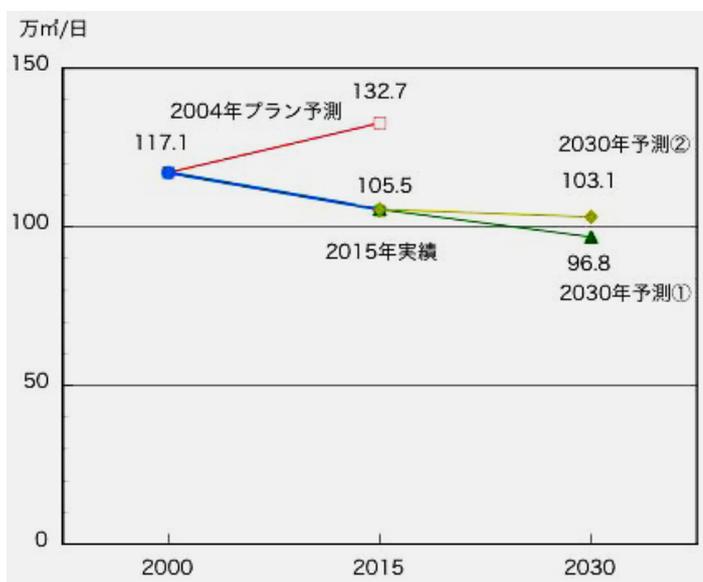
「愛知県民（名古屋市も含む）の市民生活と水道水、長良川河口堰の役割」

ダム・河口堰などの建設の根拠となってきた「木曾川水系水資源開発基本計画（通称はフルプラン）」は、徳山ダムの建設途中の2004年に策定されたものが最新で、2015年までの需要を予測していましたが、もうそれを過ぎてしまっています。利根川、淀川など全国の指定水系でも同様で、見直しが必要となっているにもかかわらず、国土交通省は行っていません。そこで検討委員会では独自に愛知県の水需要予測を行なう作業を進めてきました。

第1部の富樫報告ではまず、2015年の需要の予測と、この年の最新の実績がどのように違っているのかを検討しました。尾張地域の日最大の給水量ベースで、2000年の117.1万 m^3 /日から2015年には132.7万 m^3 /日と増えるという予測に対して、同年の実績は逆に減少して105.5万 m^3 /日に過ぎませんでした。原因は、1人1日当りの家庭用の有収水量が2540から2600に増えるはずだったのに対して、2350と節水が進んだこと、都市活動用水と工場用水でも需要が減少したためです。

さらに、年間を通した日平均と1日最大の比率である負荷率は84.3%から80.1%と推定していたのに対して、88.8%へと上がっています。浄水場からの給水量と、家庭・事業所のメーターで検針された有収水量の比率をとった利用率でも、99.2%から91.6%のはずが、99.6%とほとんどロスがない状態となっています。

1日最大給水量が減少し、よこばいから微減となっている日平均給水量との差が小さくなった原因を明らかにしたいと考えて、名古屋市上下水道局と愛知県企業庁から、2014年7月の1日単位の給水量のデータを提供してもらいました。その結果、梅雨の晴れ間と梅雨明けにピークがでることから、洗濯機がフルに稼働しても、それが節水型に次第に買い替えられてきたことが原因ではないかと考えられました。



尾張地域（名古屋市給水区域を除く）のフルプランの2015年予測と実績、2030年予測

また、名古屋市では業務向けの給水に対して、事業所が地下水に転換しています。その影響が2003～14年の間の業務用の減少の2.2万m³/日の減少に対して、その約3分の1の8700m³/日（下水道としての調定量）に当たることも分かりました。

次に、2030年に向けた需要の予測です。①1人1日当りの家庭有収水量が235→216ℓ/人・日にさらに節水が進み、都市活動用水、工場用水も減少傾向が続くとして、負荷率も90%（東京都並み）になるとすれば、日最大給水量では-8.3%の減少になります。②家庭有収水量が230ℓの微減とした場合では-2.2%で、①～②の幅の中におさまるだろうと考えました。愛知県企業庁の経営戦略（平成28～37（2025）年度）では、水道の給水収益を10年間で1.85%の減少とみているので、2030年までそのまま延長すれば-2.78%の減少ですから、①のケースに近い計画となっていることが分かります。なお、名古屋市の「水プラン32」では2015年から2020年までさらに-4.25%の需要の減少が見込まれています。

「水まわり住宅設備の節水化と水使用量変化」

豊貞佳奈子先生（福岡女子大学国際文理学部環境科学科准教授）の「水まわり住宅設備の節水化と水使用量変化」では、TOTOでご研究をされていた時期の成果も踏まえて、実際の家庭での水道水の利用の調査結果を教えてくださいました。大渴水の経験のある福岡市では、節水対策を進めて、家庭における1日当りの水使用は2000まで下がっています。大便器の浄水量は国際的にも規制が進んでおり、一回当り6～40台まで下げられています。エアシャワーの小流量吐水型、水優先吐水の水栓など、具体的な装置の技術も紹介されました。節水だけでなく、CO₂削減を併せた予測も示されています。

「渴水と付き合い知恵（取水制限という知恵）」

3つめの蔵治光治郎先生（東京大学大学院農学生命科学研究科教授）の報告は、渴水をめぐる考え方についてです。「取水制限」は雨が少ない時の予防策からはじまって、深刻な渴水となった場合の緊急水利調整協議会での「取水制限」の率の引き上げや利水者間での調整となります。これに対して「給水制限」は、それほど影響のでない「減圧給水」から始められて、1994年の大きな渴水時のような「時間給水」（断水）との違いが説明されました。平成21（2009）年以降は、取水制限はなかったか、あった場合でもほとんど影響のでない5～10%に止まっています。つまり被害としてはでていない訳です。取水制限の開始によって、ダム貯水率の低下は遅くなりますし、愛知用水では牧尾ダムの貯留量が低下すると、阿木川、味噌川の両ダムとの統合運用に入ることによっても、影響は出にくくなっています。

第2部の質疑では、なぜ電力と違って、水道の場合は節水に行政の予算がつかないのか（余っており、水道局の収入が減るから？）、人口減少や施設の老朽化対策など、維持管理が重要な時代に入っていく、東京都もオリンピックを目標としてトイレの洋式化を進める、農業用水でも農地が減少してきており、渴水対応の制度づくりがポイントである、1994年渴水を経験した知多が、なぜ福岡のような対応ができないのか（普段は裕な木曾川に依存しているから）、などの意見が出されました。

水道事業の危機はなぜ起きたか

近藤夏樹 自治労連公営企業評議会 事務局長

国・厚生労働省は、①水の使用量が減り収益が下がる②大規模更新の資金がない③耐震化が進まない④職員不足と技術低下が起きている、などの理由で、水道事業の安全と安定が保てないと危機感を伝え「基盤強化」が必要だとしています。

なぜ水道事業の基盤が揺らいでいるのか？国とは違う視点から簡単にみてみましょう。

過大な水需要計画

現在、水道水源のダム水源比率は約 9 割ですが、水需要計画と現在の水需要の隔たりは大きく、例えば名古屋市では現在の最大給水量と水利権には 2 倍の差があります。このような状況は全国で起きており、水源開発の費用負担により当然、経営が苦しくなります。

小規模水道の苦悩

給水人口 100 人以上 5000 人未満の簡易水道事業は、国、市の交付金により経営が成立っています。しかし、国・財務省は簡易水道事業への補助削減のため簡易水道事業統合を進め、統合前提の補助制度へシフトさせました。

給水人口密度が低く効率が悪い「不採算」な簡易水道事業を次々と統合していききましたが、その受け皿となった水道事業体は独立採算制ですから一般会計からの補填ができず「赤字」となり経営が困難となっています。しかし、水道事業は憲法で保障された生存権を具現化する事業ですから「不採算なのでやめる」という事業ではありません。

技術者がいないので設計、工事が進まない

耐震化や更新工事を進めるためには設計・施工監督する職員が必要ですが、国・総務省は職員数を大幅に減らす指導を地方自治体に対して行なってきました。また、人員削減により進んだ委託化は水道事業体から技術力を奪っていきました。更新工事は水道創設期の新設工事より難しく、特に都市部では錯綜した工事となることや、工事にあたっての書類作成など業務量が増えています。国は「最近、技術職員は採用傾向にある」と言いますが、採用しても応募に応じてこない、年齢構成の二極化が起きて技術継承がうまくいかない事例や、他の部局との人事交流により水道技術者が育たないことも問題となっています。

「基盤強化」には広域化と官民連携しかない？

このように簡単に見ても、国が進めた施策①ダムなど大規模工事優先②福祉予算の切捨て③自治体の人員削減圧力などにより水道事業体の体力は削がれています。

現行水道法は、「水道事業を保護育成する」とされていますが、国はこの目的を果さず、「基盤強化」には広域化と官民連携しかないかのような議論を進め、水道法「改正」により広域化の推進と官民連携（コンセッション方式）の導入を進めようとしています。

2011年 PIF 法の改正で規定された「公共施設等運営事業」（コンセッション方式）とは、公共施設等の管理者等から公共施設等運営権を設定（譲渡）された民間事業者が、公共施設等運営権者として自ら資金を調達し、維持管理等を行い、利用料金を直接自らの収入として事業を経営することをいう。

ダムに水源を求めた広域水道

広域化は、水道普及率 60%の時代に始まり、昭和 42 年度の国庫補助制度設立、昭和 52 年度の広域的水道整備計画を規定した水道法改正により多くの事業が創設され、昭和 45 年度には 94 事業、平成 12 年度に最多の 194 事業となりました。広域的水道整備にあわせて行われたのは、新規水利開発（ダム・河口堰）であり、後発水道事業である広域水道（用水供給事業）は水利権をダムに頼らざるを得ない体質をもって生まれました。

現行水道法では広域化が進まない

広域計画に関して現行水道法では、地方公共団体が①水道の広域的な整備を図る必要があるとき②関係地方公共団体と共同し③広域的な整備に関する基本計画を都道府県知事に要請することができる。こととなっており「水道事業は原則、市町村が運営する」とことと合わせて地方自治を尊重した法体系となっています。しかし、これでは地方議会の反対と住民の心配により広域化が進まないため、水道法「改正」（案）では①国が基本方針を定め②都道府県が基本計画を策定し広域的協議会を設置し③地方公共団体は協議会の決定事項を尊重する。という地方自治を無視した図式にしようとしています。

「官民連携」へのハードルを下げる

国は「広域化と官民連携はセットで進める」としています。広域化すれば地方議会の関与が薄くなり、次のステップである「民営化」へのハードルが低くなると考えているように見えます。法改正に先行して地方議会へコンセッション導入を提出した大阪市や奈良市では否決・廃案となっています。

世界は再公営化へ

コンセッション方式導入は、安倍政権の国家戦略（骨太方針 2016 でも推進）で、水道収入 2.7 兆円（地方公営企業年鑑・H24 年度決算）を狙った「公務の市場化」が目的です。

しかし、世界では民営化された水道事業の再公営化が流れで、2000 年から 2015 年にかけて再公営化された事例は 235 件、現在も増加傾向にあり、民営化は遅れた政策なのです。

国は「そうならない民営化を」と言い、モニタリング（管理・監督）を強化するとしていますが、現在でも委託増加により「現場を知らない」事業者が増えている中、果たしてモニタリング機能が維持できるのか疑問です。

最後に、2008 年に民営から公営へもどす理由を説明した、当時、フランス・パリ副市長の言葉を記します。

「水は自然から与えられた人類の共有財産。短期的な利益のために動く企業に任せられないでしょう」「企業なら株主にまわるお金を、公営なら設備投資に使えます」

岐阜県長良川河口堰調査検討会を傍聴して

堀 敏弘 長良川市民学習会

2月23日（木）に開催された岐阜県の平成28年度長良川河口堰調査検討会（以下検討会）を傍聴した。

この検討会は学識経験者、各種団体の代表者、県・市町村関係者の委員で構成され、岐阜県河川課から昨年9月27日に開催された長良川河口堰県民調査団の報告、水資源機構から長良川河口堰の最近の管理状況についての報告がされた。結論から言えば、県民調査団については環境では「今後も調査を行ない、推移を見守っていく」、水害や治水などについては「理解できた」、河口堰の機能や必要性についても「理解できた」と参加者からのアンケートを取って終わり、水資源機構の報告も「特に問題ありません」だった。

なお今回の検討会の詳しい報告や議事録については岐阜県河川課のホームページにあるので見ていただきたい。<http://www.pref.gifu.lg.jp/shakai-kiban/kasen/dam/11652/kakouzeki.html>

私も過去にこの検討会を傍聴したことがあるのでこの結果は予想された。しかし今回傍聴してみてもあらためてびっくりしたことがいくつかある。1つはこの検討会のゆるんだ雰囲気。はじめから結論がありきでそこへ持っていくためのあらすじもできているためか、まるで演劇の稽古での本の読み合わせを見ているようだった。これは傍聴人に発言の機会が与えられていないため批判にさらされる緊張感が無いことが原因ではないでしょうか。

もう1つは県民調査団の資料にあった「参加者からの意見」についてである。平成28年度の調査団は71名の参加で実施され、長良川河口堰、安八水害破堤箇所等を見学したとある。このうち45名が学生と教員とあり、学生たちが下のような感想や意見を書いていた。

「河口堰によって治水・利水効果で安心安全な生活ができている。」「魚や貝などが生息できるように環境にも効果があることがわかった。」「説明の途中で（メディアでは河口堰のせいで鮎が獲れにくくなったと説明されているが実際はそうではない）とあったので正しい認識を広めてほしい。」「治水、利水、環境を考慮した本当にすごい建物だと思った。」「ゲートを上手に開閉して塩害や洪水による被害を防いだり、様々な川の生物と共存できたりする点が面白い。」・・・・・・・・

事業者からの一方的な説明なのでこうしたアンケート結果になったのかもしれない。生まれた時にはもう河口堰が運用されていたその学生たちに必要なのは、自分で考える力を持ってもらうことではではないでしょうか。愛知県で「開門調査」が議論になっていること、河口堰反対の市民運動が今も脈々と続いていること、ヘドロ化した川底や激変した堰上下流域の現状等も教えることが必要です。他にも質疑の中で、長良川温泉旅館組合の委員が、世界農業遺産の話をする時、お客さんから「でも河口堰があるんですね。無かったらいいのに」と言われ困ったと話された。お客さんのもっともなこの疑問に対する結論は、「河口堰に来てもらえば理解してもらえ」となった。もう口があんぐりである。下流域を世界農業遺産から外して申請しておいて！

他にも、委員から「岐阜県と愛知県のいろんな運動（開門調査への動きを指していると思われる）と温度差があるのか理解できないまま動いているが」と参考意見があったが、議長はスルーしてしまった。そして最後に議長の「これで議論が尽くされたと思います。」の言葉と「異議なし」の委員の声で検討会は「すんなり」閉会した。

揖斐峡 西平だより

粕谷 豊樹 長良川市民学習会

5月の中旬 しばらく続く晴天に誘われて揖斐の谷を遡る。福井の南越前町に抜ける高倉峠（こうくら）を目指す。山の緑は深みを増しあちこちに各種のうつぎが少しづつトーンの違う薄い赤い花を咲かせている。ダム湖の最奥 塚より林道に入りしばらくゆくと道は左右に分かれる。右は冠峠を越えて越前の池田町に下ってゆく。この道は私がもう少し若かりし頃 峠に車を駐めて東に稜線をつたい冠山（1257m）と秀麗な姿が岐阜市や大垣市から眺められる西の金草岳（1227m）に登ったことがある。今回は二岐を左側に進む。揖斐川の最源流の道谷に沿って深い森をくぐりウソ峠を越えて高倉峠に立つ。



快晴である。 はるかに北に広がる越前の野は悠久たる大自然そのものです。古代の越の国とはこうであったのか〜と妙な感想をもらす。来し方 美濃揖斐の谷は直近の釈迦嶺（1175m）が遮り展望はない。かつて金草岳の頂上で見た揖斐の谷の光景は真下に徳山の水の帯が広がる大自然の中に人間の痕跡はどこにも見えなかった。この山塊と深い谷は今も自然そのものである。

西平に水を取りに入り始めてからすでに数年が経ちました。幸いにして揖斐峡西平は今年も静かであります。冬の日 揖斐峡をはさむ二つの集落 乙原と三倉に「よみがえれ長良川」のリーフレットを配り、直接地元のみなさんにお話を伺いました。庭掃除をしておられた中年のご婦人は無駄な工事であり自然を破壊することをよく認識されていましたが〈それを止めるのは岐阜市や下流の人たちの仕事だ〉ときっぱりと静かに言われました。それから私はその一言がず〜と気になっています。



私たちが毎月計測、記録し公表している客観的な調査結果があります。少子高齢化で人口が減り続ける日本で赤字国債を発行してまでなんで自然を傷つける効果の無い無駄な工事をするのか？私達は水資源機構や国そして県や市の行政に訴えています。この結果数値は揖斐の谷の皆さんに責任はありません。揖斐の谷の皆さんが最初の被害者だったのです。下流の私達そして市民はそのことを思い、配慮してこの水を長良川と木曾川に決して流してはなりません。揖斐の谷の皆さんと駄目なことはダメという市民がこの谷の静寂を保っています。幸いにして揖斐の谷は今日も静かです。

下の表は、本年鶉飼い開き2日前の観測値です。6.0〜7.0℃も揖斐川の水が冷たいです。

水質調査結果

2017年5月9日(火)午前8:00

採水場所		時刻	天気	気温 ℃	水温 ℃	濁度	電気伝導度 ms/m
西平(揖斐川)	流心	8:00	曇	16.0	10.5	0.5	6.5
	右岸			15.0	11.0	0.5	6.5
千鳥橋(長良川)	流心	8:00	曇	18.0	17.0	1.0	8.2
	右岸			18.0	17.5	1.0	8.1

事務局から

昨年末から、長良川にとって大切な方たちの訃報が相次ぎました。かつて国立名古屋病院労組委員長も務められた谷山忠士さんはニュース放送作業にはいつも駆けつけてくださいました。熊本の出身で、ダム撤去がされた荒瀬ダムのあった故郷の球磨川、川辺川のことをよく話されました。村瀬たけのさんは河口堰建設差止訴訟の事務局長だった夫の惣一さんをずっと支えられ、惣一さんが亡くなり施設に入られるまでは市民学習会にも参加していただきました。木村厚子さんはDAYS JAPANなどの活動で忙しい中、韓国4大河川事業視察にも参加されました。明るい笑顔が忘れられません。永井豪さんは岐阜新聞で論説・編集委員を務められ、2010年には半年にわたり、瀬見井、西山記者と共に優れたルポ「ぎふ海流」を担当されました。みなさまのご冥福をお祈りいたします。

■ 半年を振り返ると様々なことが起きました。個人的には父親の看病をして、最終的には自宅での看取りが出来て、家族も仲良くなり幸せでした。社会情勢を見ると原発再稼働、憲法9条改憲、戦争法、共謀罪の成立など廃案にしないことが、かなり性急に進められとても悲しく思いました。長良川については来年が建設費償還完了・運用23年目と聞きました。堰も古くなり、修繕費も増えるでしょう。運用され市民に利益をもたらしているのか非常に疑問だと思います。この年を機に、河口堰を廃止してはどうでしょう。是非論議をより一層高めていきたいものです。家族の変化もありますが、活動を通じて私の役目を果たしたいと思います。(中川 篤)

■ 私は7階建のアパートに住んでいます。エレベーターもありますが、住んでいる5階の部屋の前に非常階段があるので、週2回のゴミ出しの時には歩いて上り下りしています。階段数は64段、今のところは途中で休まずできていますが、いつまでできるかな？ 継続は力！この思いは長良川を思う気持ちも同じです。頑張ります！！ (岡 久米子)



絵(はまぐり) 久米子

■ 呆れるような奇策を使って、与党は「共謀罪」を成立させた、一刻も早く国会を閉じて「もり・かけ疑惑」にフタをしようという魂胆が丸見えで「恥ずかしい」。

この「共謀罪」は、沖縄の基地建設反対の座り込みを標的にしている、と言われている。機動隊は、6月に入ってから、辺野古の工事ダンプの出入り口に座り込んでいる市民だけでなく、道路の反対側でマイクでスピーチしているリーダーをも暴力的に排除するようになった、曰く「工事妨害を煽動している」。

「本土の高江・辺野古」と言われているのが、長崎県の石木ダムである。ダムによって居住地を水没させられようとしている地元の石木ダム建設絶対反対同盟を中心として連日の座り込み行動が果敢に行われ、長崎県の強引かつ違法な工事強行を止めようとしている。

この闘いを支援しきることができるのか、それとも「共謀罪」の標的とされて一網打尽にされるのを黙過することになるのか・・・権力を富に着た不当な自然破壊・税金の無駄遣いに抗しようとする私たちの本当の意味での覚悟が試されているのではないだろうか。(近藤ゆり子)



本紙の「校歌に歌われた長良川」で紹介した学校は小学校15、中学2、高校6、大学1、特別編2、計26校でした。ご愛読ありがとうございました（バックナンバーは長良川市民学習会HPをご覧ください）。今号からは「よみがえれ長良川」の参加団体を紹介していきます。トップバッターは「河口堰に反対し、長良川を守る岐阜県民の会」にお願いしました。なお、同封しました同会の署名に是非ご協力ください。

参加団体紹介

河口堰に反対し、長良川を守る岐阜県民の会

加藤 守

本会は1989年12月に河口堰問題に関心がある市民が集まって結成総会をひらきました。

(1) 国会請願署名運動の展開

90年3月に署名運動を開始、同年10月に本会代表（複数人）が国会へ行き、第1回目の国会請願署名（14,376名分・街頭署名、個人が集めたもの、各団体に協力していただいた分）を衆参議長に提出。以降8回提出し、現在10回目の署名運動を展開しています（毎月1回街頭署名活動などを実施）。



(2) 「天然稚アユ遡上観察会」の実施

99年以降、毎年5月中旬に、河口を同じくしている揖斐川筋と河口堰の魚道を、天然稚アユが遡上しているか実地観察会を実施。揖斐川と支流の根尾川で数か所観察。水温が低い年は確認できないが、高い年に堰堤を登る姿が確認されます。昨年今年も稚アユの遡上が見られました。河口堰魚道では毎年ほとんど確認できません。

(3) 各環境市民団体との共同行動

現在は、「よみがえれ長良川実行委員会」（28の環境市民団体で構成）の一団体として参加し活動しています。

ご参加ください！

- 7月15日（土） 愛知サマーセミナー 「よみがえれ長良川・河口堰を開門しよう」で参加します。
同朋大学 博聞館 2F H205 13:10～14:30 <http://www.samasemi.net/2017/>
（地下鉄東山線中村公園駅より市バスで5分、鴨付町下車）
- 7月20日（木） 内ヶ谷ダム建設現場見学会 岐阜県の工事事務所の案内で見学します。
JR岐阜駅南 10:00時集合・出発 参加費無料：予約は090-1284-1298 武藤
- 7月25日（火） パタゴニア名古屋店で上映会 19:45～ 入場無料：予約は052-950-7721 名古屋店
石木ダム反対闘争、上関原発反対闘争などのドキュメント映画が上映されます。
- 8月19日（土） 市民学習会「よみがえれ長良川」III 岐阜の魚と長良川の今
ぎふメディアコスモス・かんがえるスタジオ 14:00～16:30
講演：岐阜県の魚類 向井貴彦（岐阜大学） 長良川下流観察会報告：武藤 仁
- 9月9日（土） 「導水路はいらない愛知の会」裁判記録集発行記念総会
講演：富樫幸一（岐阜大学）・近藤夏樹（名水労）
東別院会館2F 椿 13:30～16:30 （地下鉄名城線東別院4番出口）
- 9月16日（土） 環境デーなごや2017 「よみがえれ長良川・河口堰を開門しよう」のブース出展。
久屋広場（栄）10:00～16:00 <http://www.kankyoday.com/chuogyoji/>

発行：長良川市民学習会

<http://dousui.org/>

代表：粕谷志郎

連絡先：武藤 仁／090-1284-1298

〒500-8211 岐阜市日野東 7-11-1

- 私たちの活動は皆様のカンパで成り立っています。
賛同してくださる方は、ぜひカンパをお願いします。

ゆうちょ銀行口座：00840-3-158403

口座名称：長良川市民学習会